
月の涙

燐麗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の涙

【Nコード】

N1602E

【作者名】

燐麗

【あらすじ】

殺し屋として育てられた青年、生まれながらにしてアレスティア国の王女として育てられた少女。二人が出会ったのは偶然なのかそれとも必然なのか・・・これはそんな二人の純粋で愛しい愛の物語

プロローグ

夜が更けた街をディアンは歩いていた。

街はひっそりと静まりかえり誰一人歩いていない。

ディアンはあるひとつの明かりのついていない家の前で立ち止まった。

（ここの家か。）

そしてドアの鍵を壊し、息を殺して中に入った。

部屋の中は、薄暗くしんと静まりかえっているが確かに人がいる。かすかに呼吸をしている音が静かな部屋では聞こえる。

奥のほうにベッドがあり、人はそこで寝ているらしい。

一通り部屋を見回した後、ディアンはベッドのあるほうに向かった。

みると寝ているのは中年の男だった。

ディアンは男が寝ていることを確認するとポケットから銃を取り出し、ゆっくりと男の心臓のほうに銃口をあてる。

そしてディアンは一気に引き金を引いた。

と、同時に男の体もわずかに動く。

銃声が静かな部屋に大きく響きわたった。

男は血を流していた。

ディアンも振り返り血を浴びて服が赤黒く染まっている。

脈を確認して死んでいることを確かめてから自分についた血を何事もないかのようにふき取った。

まだ服にはたくさん血がついていたが・・・。

「任務終了」

そう呟いて部屋を後にした。

そして暗い夜の街を『自分の帰る場所』にむかって歩いていた。空をみると綺麗な満月がはっきりと見える。

冷たい風が心地いい。風がディアンの髪を優しくなでていく。

何も考えずただ歩いているだけ。
胸元のネックレスの宝石がやけに輝いていた。
ようやく『自分の帰る場所』が見えてきた。
そして扉の前に立ち、静かに開けた。
もう仲間たちは寝静まっているようだ。
薄暗い部屋に月の光が差し込んでいて少しは中が明るい。
ディアンは真っ直ぐ自分の部屋に戻った。
そのままベッドに入り、深い眠りに落ちた。
明日には今日のことが殺人事件として騒がれるだろう。
でも絶対に犯人は見つかることはない。
ディアン・ムーンという青年は最強の殺し屋なのだから。

そのころ、城では盛大なパーティが行われていた。
もう深夜も過ぎているのにそのパーティは続いていた。
城の中ではたくさんの富豪達が集まっている。
ダンスを踊ったり、酒を飲んだりと楽しそう。
しかし、パーティーの主役はつまらなさそうな表情で玉座に座っていた。

幼さが残っているが美しい顔立ち。

（今日は私の誕生日なんだから、もう終わらせたいのに）
ノエルは飽き飽きしていた。

パーティーを開いてもなんの利益もない。

ただのつまらない行事。そんな風に思っていた。

早く終わらないかな・・・

ただ時が過ぎるのを待っていた。もう何時間も終わるのを待っている。

もしかしたらパーティーなんて永遠に終わらないかもという考えがよぎるほどだった。

一日がこんなにも長く感じたのは初めてだった。
その王女がパーティーが終わるまで何もしなかったのはいつまでもない。

第一章

辺りは暗い闇の中。どこを見ても暗いだけ。

その中にディアンは立っていた。

ここはどこなんだ。

少し前に進んでみる。けれども何もかわらない。闇が広がっているだけだった。

音も風も何もない空間。

ディアンは混乱していた。

なぜ俺はここにいるんだ。

いったい何が起こっているのかわからなかった。呆然と立ち尽くしている。目の前にうつすらと光の玉が現れた。

何だろう。

だんだん光が大きくなる。それとともに光も増してくる。

先程まで暗闇だった空間にみるみる光があふれ出した。

あまりの眩しさにディアンは目を細める。

よく見るとその光は女の形に変わっていく。手、足、顔とだんだんパーツがはつきりとしてくる。少しの時間でそれは完全に女の形になった。

誰だ。

心の中でつぶやく。

こんなわけのわからない事態にたたされているのに、もうディアンは冷静になっていた。

「あら、はじめまして。ディアン」

目の前の光、いや、女がしゃべった。それにはさすがにディアンも驚いていた。しゃべるなんて予想外のことが起こったのだから。

「お前は誰だ。なぜ俺の名を知っている。」

ディアンは冷たく言い放った。

「そんな冷たい言い方しなくてもいいのに。私は、エレンです。女

神といったところかしら。なぜあなたの名前を知っているかつて？話が長くなるからいちいち説明するのは面倒だわ。機会があればそのうちきつと話すわ。」

笑顔でそういった。

ディアンはじつとエレンを見つめていた。

なんだか前にも会ったことのある感覚。

なぜだろう。

「お前、俺と前に会ったことあるか？」

「えっ。な、な、何いきなり。さ、さあ。わからないけど。」

明らかにエレンは焦っていた。

これはなにかあるな。でもまあいい。

「それで、俺に何か用があるからここにいるんだよな。」

「あっそうそう。ディアンに用事があったのよ。」

「何だ。」

すると、今のいままで笑顔だったエレンが急に真剣な表情に変わる。

「ディアン、これから私の話すことをよく聞いて。」

さつきとはまるで別人のようだった。

「あなたは愛を見つけなさい。」

いきなり不思議なことを言った。

しかしそれでもディアンは冷静だった。表情一つ変えないで言葉を返す。

「俺には愛なんてものがない。」

「いいえ。そんなことないわ。これからのあなたにとってとても必要になってくるの。」

「なんでそんなことがわかるんだ。」

はっとエレンは息を呑んだ。

「あ、あ、あら。なんでもよ。そう、なんでも。そ、そんな気がするだけよ。」

どうやらエレンは隠し事や嘘が苦手のようだった。こんなに言葉

をつまらせているなんてわかりやすすぎる。ディアンはもう問わないことにした。

「まあとにかく、あなたは愛を見つけて、知らなきゃいけないの。」

「そんなことできるわけないだろ。」

「あなたならできるわ。大丈夫よ。あなたはあなた自身のやり方で愛をみつければいいの。きっとすぐに見つけられるわ。」

「そんなわけ・・・」

「じゃあ私そろそろ行かなくちゃ。」

初めて会った時にみせた笑顔でそう言った。

「おい。待てよ。」

「私はいつもあなたの傍で見守っているわ。たとえ見えなくてもいつでもね。私の言った言葉忘れないでね。」

そう言ってエレンは消えてしまった。

それと同時に目の前に光景が急にかわった。

今度はなんだ。

すると、ディアンは仰向けになっていた。今の自分の状況がわからない。

いったいさつきからなんなんだ。

ディアンは考えた。

なぜ今、自分は仰向けになっているのかと。

「もしかして、さつきのことは夢だったのか？」

独り言のようにつぶやく。

夢だとすると今の状況に納得がいく。さつきのは夢で今、自分が目覚めてベッドの上に仰向けになっている。そう考えたほうが一番合理的だった。

でも本当にそうだったのか。夢にしてはあまりにリアルだった。

エレンと名乗る女神。そしてエレンからのあの言葉。

“あなたは愛を見つけないさい”

鮮明に覚えていた。

愛なんてとつくの昔に捨てている。ディアンは愛すること、愛さ

れることなんて忘れてしまっていた。今はただ“依頼”をこなしていくだけ。自分の感情は奥深くに閉じ込めている。

そう・・・そんなものは俺には必要ない。

仰向けの状態のままそんなことを思った。

ゆっくりと起き上がるとやはりいつもの風景。

「やっぱり夢か。」

きつと昨日は疲れていたからだ。だからあんな不思議な夢をみたのだ。

ベッドから降りて、何事もなかったかのように身支度をする。

けれども何かが引つかかって忘れようにも忘れられない。

幼い頃の記憶のないディアンにとってエレンは懐かしい存在に感じていた。

「そんなことはもういい。そろそろ行くか。」

ディアンはぼそりとつぶやいて奇妙な割れてしまったような形の月長石のネックレスをつけて部屋をでた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1602e/>

月の涙

2010年10月28日00時43分発行